

## 「していない罰」を受けられますか。

私達は創世記より最初の夫婦、アダムとエバを見ました。彼らは神様から無尽蔵の祝福を受け、エデンの園に暮らしていました。しかし、唯一、与えられた制限、すなわち「これだけは食べてはいけない」と言われていた一本の木の実を食べてしまいました。このことに対してアダムは神と妻エバに、エバは蛇へとその責任を転嫁しました。このことがこの夫婦の互いの信頼関係を著しく悪くさせたであろうということを私達は容易に想像できます。そうこの問題は完璧な環境であったエデンの園で起きました。私達はここから問題とは完璧な環境でも起こるという教訓を得ました。

そんな彼らに息子が与えられました。人類最初の子です。彼はカインと名づけられました。エバはこの子の誕生を喜び、「わたしは主によって、ひとりの人を得た」と言いました。エバが言いました「人」という言葉は「カイン」を意味する言葉で、またそれは彼の夫、アダムの名を意味するものでもありました。そう、エバは自分に責任を転嫁するような信頼の置けない夫に代わる存在として、その長男の誕生を喜んだのです。言うまでもなく、このエバの思いもこの夫婦の関係に影響を与えたであろうことが想像されます。

やがてアダムとエバには二人目の息子が生まれました。彼らはその子にアベル、すなわち「むなしい」を意味する名前をつけました。なぜ、彼らはわが子にこんなに悲しい名前をつけたのでしょうか。夫婦の原則として「二人は一体となる」と聖書が記しているにも関わらず、アダムとエバの間に子、カインが割って入ることにより、その原則がないがしろにされ、ゆえに生じた夫婦の問題、ひいてはそれが家族の問題として彼らの間に爪痕を残してしまったのかもしれません。

もし当初の責任転嫁の性質がこの夫婦にそのまま残っていたとしたら、それは子供たちにも継承されていったことでしょう。その証拠として、彼らの長男カインは神から自らのいたらなさを指摘された時、大いに憤り、神から顔をそむけ、弟を野原に連れ出し、彼を殺害したのです。カインの問題の原因は彼自身にあったのですが、彼はあかたもその責任は弟、アベルにあるかのようにして、彼の命を奪いました。そう彼は自らの責任転嫁の代償として血を分け合った弟の命を奪ったのです。

先週、読みました箇所では神様はカインに四度、たずねています。『なぜ、あなたは憤るのですか』（6）『なぜ顔を伏せるのですか』（6）『弟アベルは、どこにいますか』（9）『あなたは何をしましたのです』（10）

ここでカインは四度、「問題はカインにも神にもなく、この問題の原因は自分にあります」と言い表すチャンスがありました。しかし、彼は開き直り、自分の非を認めることはありませんでした。自分の非を認めず、あのことこのことにその責任をなすりつける、「わたしは悪くないのだ」という彼の思い、それは頑なであり続けたのです。

そのような暗澹たる状況で先週のメッセージは閉じられました。主にある皆さん、これらのことは聖書の冒頭5ページに記されていることなのです。しかしながら、そこに私達が今日、抱えている諸々の人間の問題の原因を見出しませんでしょうか。問題はこの問題の原因に私達が気がつかないことであり、ましてや、その問題が自分にはあるのだということは露だに思わず、アダム、エバと同じように問題はあいつ、こいつにあるのだと思い、相手も同じように考えていますから、問題はこじれてこじれていきます。またたとえ、これらのことに気がついて、はたして実際にどうしたらこの問題は解決できるのだろうかということを私達が知らないということも問題なのです。

さて、その後のカインはどうなったのでしょうか。神様はカインに話しかけます。10 主は言われた、「あなたは何をしましたのです。あなたの弟の血の声が土の中からわたしに叫んでいます。11 今あなたはのろわれてこの土地を離れなければなりません。この土地が口をあけて、あなたの手から弟の血を受けたからです。12 あなたが土地を耕しても、土地は、もはやあなたのために実を結びません。あなたは地上の放浪者となるでしょう」（創世記4章10節—12節）。

この時以来、私達もカインと同じく、本来おるべき神のもとから離れて生きる、地上の放浪者なのです。私達が行く先々で私達が願うような収穫を得ることはとても難しく、私達は今も徒労の中に生きています。カインはこの言葉を受けて、神にこう答えます。

13 カインは主に言った、「わたしの罰は重くて負いきれません。14 あなたは、きょう、わたしを地のおもてから追放されました。わたしはあなたを離れて、地上の放浪者とならねばなりません。わたしを見つける人は誰でもわたしを殺すでしょ

う」。(創世記4章13節-16節)

カインは神様に問われて、やっと自分がしてしまったこと、それゆえに彼が背負わなければならないことを知り、思わず彼は嘆いたのです「わたしの罰は重くて追いきれません」。彼は弟を殺しましたが、今度は私が誰かに殺されるかもしれない、その恐れと彼は生きなければならなくなりました。

カインが「わたしの罰は重くて負いきれません」と放った一言は、以降、そのまま保留され、彼と同じ叫びを無数の人たちが心に持ち続けることになりました。そして、長い長い年月が経ち、この叫びが日の目を浴びることになります。その叫びをもう一度、光のもとにさらしたのは使徒パウロでした。彼はカインの父アダムがしたことを持ち出してきて、こう書き残しました。

12 このようなわけで、ひとりの人によって、罪がこの世にはいり、また罪によって死がはいつてきたように、こうして、すべての人が罪を犯したので、死が全人類にはいり込んだのである(ローマ5章12節-21節)。

そうです、これまで三週にわたりお話ししてきました「責任転嫁」、自分は悪くはないという思い、これを聖書は「罪」といいます。パウロはその罪がはいつてきた時のことをここに書いています。ここに記されている「ひとりの人によって、罪がこの世にはいり」とはカインの父、アダムのことです。そう、彼がああ禁断の実を食べた瞬間、その源流から罪が流れ始め、それは私達の魂にも流れるものとなりました。まさしく、それは「全人類に入り込んだ」のです。私達がアダムとエバのこと、カインとアベルの物語を聞きます時に、それはこれまで聞いたことがない真新しいことではなく、どこかで私達が見聞きしていること、また自分自身が経験したことがあることとして、それを聞きます。なぜでしょうか、そうです、それはまさしく、パウロが書いておりますように、その罪が私達の心にも入り込んでいるからです。

そしてパウロは「一人の人によって罪が入り込んだ」という、その事実に対して、「もう一人の人」についてこう書き残しました。

15 しかし、恵みの賜物は罪過の場合とは異なっている。すなわち、もしひとりの罪過のために多くの人々が死んだとすれば、まして、神の恵みと、ひとりの人イエス・キリストの恵みによる賜物とは、さらに豊かに多くの人々に満ちあふれたはずでは

ないか。16 かつ、この賜物は、ひとりの犯した罪の結果とは異なっている。なぜなら、さばきの場合は、ひとりの罪過から、罪に定めることになったが、

恵みの場合には、多くの人の罪過から、義とする結果になるからである。17 もし、ひとりの罪過によって、そのひとりをとおして死が支配するに至ったとすれば、まして、あふれるばかりの恵みと義の賜物とを受けている者たちは、ひとりのイエス・キリストをとおし、いのちにあって、さらに力強く支配するはずではないか。18 このようなわけで、ひとりの罪過によってすべての人が罪に定められたように、ひとりの義なる行為によって、いのちを得させる義がすべての人に及ぶのである。19 すなわち、ひとりの人の不従順によって、多くの人が罪人とされたと同じように、ひとりの従順によって、多くの人が義人とされるのである。20 律法がはいり込んできたのは、罪過の増し加わるためである。しかし、罪の増し加わったところには、恵みもますます満ちあふれた。21 それは、罪が死によって支配するに至ったように、恵みもまた義によって支配し、わたしたちの主イエス・キリストにより、永遠のいのちを得させるためである（ローマ5章12節－21節）

ここでパウロは「アダム」と「イエス・キリスト」を対比しています。すなわち、創世記に記されているように、ひとりの罪過のためにこれまで多くの人が死にまじりましたが、イエス・キリストを通してわたしたちは命を得るといいます。ひとりの人の罪により、全ての人々が罪に定められるようになったが、イエス・キリストはその人の罪を義と変え、その義は全ての人にもおよぶようになったのだとパウロは言います。

カインは「わたしの罰は重くて追いきれません」と言いました。そうです、彼は父アダムから受けた自分の犯した罪の罰に圧倒されたのです。自分がしたことに対して、自分はそれを償うことなどできないと叫んだのです。しかし、パウロはここでそのアダム以来、私達の魂にあるこのカインの叫びに対して、イエス・キリストが光を照らしているといっています。そうです、それはイエス・キリストの十字架です。

十字架について私達は色々な思いがあり、また神学者も牧師たちもその十字架について色々な説明をするでしょう。私もその一人ですが、最近、私には心から離れない思いがあります。それはとてもシンプルなことで「イエス・キリストは自分がしていないことの罰を受けた」ということです。アダムがした責任転嫁は「自分がしたことを人になすりつける」ということです。しかし、このお方はそれとは全く逆のこと、「自分がしていないことに対する罰を自ら進んで受けた」のです。そう、

2016年10月16日 『『していない罰』を受けられますか？』

それは罪を無理やりかぶせられたのではなくて、彼は自らその罪を背に負い、十字架に磔にされるために、自分の足でそこに向かわれたのです。そして、このキリストが背負われた罪はあなたの罪だと聖書は語り続けているのです。そう、それは私達には到底、負いきれない罪です。

もう一年以上前になります。オフィスで仕事をしていた私に妻が電話をかけてきました。ある方の家で持たれていたバイブルスタディーを終え、帰ろうと住宅街の道から一般道に出ようとしたときに、駐車していた車がバックをしてきて、よけ切れずに私達の車にぶつかったというのです。そのことで相手ともめているというので、すぐに現場に向かいました。到着すると、右側のフロントガラスが壊れている私達の車と、左後ろがへこんでいる相手の車がありました。

妻は一般道に出ようとしたら、その車が急にバックをしてきて、よけ切れなかったと言いました。しかし、相手は妻が停車している彼の車に突っ込んできたというのです。その時、妻の車には一人の教会の姉妹と次男が同乗しており、この二人にもその時の様子を聞きますと、彼らもその車が自分達のほうに急にバックしてきてぶつかったといいます。そもそも道路脇に停車している車にわざわざぶつかりに行くという話にはありえない話で、明らかに彼がこちらに過失をなすりつけようとしていることが分かりました。

もちろん、こちらの落ち度であればそれは認めますが、明らかに彼は嘘をついていました。そこで、それはおかしいということをしばらく話したのですが、ラチがあかず、彼は自分は被害者だといひ続け、「とにかく保険会社に解決させる」と言い、その場を去って行きました。後日、保険会社からは「心配するな。全てあちらの保険会社に請求しているから」という連絡を受けました。

それは誰かが負傷するというような大きな事故ではありませんでした。車が互いにへこんだということで、無傷であったことを主に感謝しました。しかし、正直告白しますとあの時、私はかなり強い言葉で彼と話をしました。なぜなら「していないこと」を「している」とされたからです。そう、その出来事を通して「していないこと」を「している」とされることがこんなにも不快で、こんなに耐えがたきことなのだということを体験したのです。

今朝、もし誰かが皆さんに何の身に覚えのないことを指摘し、そのことを責め立てるとしたら皆さんのはどう思われますか。ましてや実際に処罰を下そうとしたらど

うでしょうか。私達は「そんなことはたいしたことじゃない」と達観することなどできませんでしょう。きっとありったけの言い分をもって自分の潔白を主張しますでしょう。皆さんの家族や友人までもが皆さんと共に、その潔白を支持するでしょう。今週、この国ではどれだけの訴訟裁判がなされるのでしょうか。人々は「これはお前の責任だろう」と言われることに耐えられないのです。そうです、それは私達には極めて耐え難いことなのです。

主にある兄弟姉妹、イエス・キリストが十字架に磔にされたということは、ご自身には何の見覚えもない、ご自身がしていないことの罰を受けたということです。しかも、その時、イエス様はそのことに対してご自身の潔白を一言も、そう、一言も主張しませんでした。まさしくイザヤがそのことが起きる750年も前に預言した様がイエス様のその時の姿です。

6 われわれはみな羊のように迷って、おのおの自分の道に向かって行った。主はわれわれすべての者の不義を、彼（イエス・キリスト）の上におかれた。7 彼（イエス・キリスト）はしえたげられ、苦しめられたけれども、口を開かなかった。ほぶり場にひかれて行く小羊のように、また毛を切る者の前に黙っている羊のように、口を開かなかった。8 彼（イエス・キリスト）は暴虐なさばきによって取り去られた。その代の人のうち、だれが思ったであろうか、彼（イエス・キリスト）はわが民のとがのために打たれて、生けるものの地から断たれたのだと（イザヤ53章6節-8節）。

そうです、イエス様はこの時、我々すべての者の不義（罪）を背負われて、十字架に向かいました。それはイエス様の不義ではないのです、アダムの性質を持つ我々がなした諸々の不義を全てイエス様は背負われました。イエス様は自分がしていないことの罰を受けたのです。イエス様は裁判にかけられました。それは不正な裁判でした。しかしたとえそれが不正なものでも、イエス様は自らの潔白を主張することができたでしょう。しかし、イエス様は一切、自らを擁護する言葉を言わなかったのです。「それはおかしい」とか「私は無実だ」というようなことを一言も言うことなく、ほぶり場にひかれていく小羊のように、イエス・キリストは実際にほぶり場に行き、十字架に手足を磔にされ、殺されたのです。誰のためですか。私はあえて「私達」とは言いません。なぜなら、それはどうしても他人ごとの言葉となりうるからです。そうです、イエス・キリストは誰の罪のために十字架にかかったのですか。それは「あなた」のためです。

2016年10月16日 「『していない罰』を受けられますか？」

イエス様はこのことが起こる数時間前、ゲッセマネの園で血がしたたるようなさらにイエス様は十字架の上でおよそ信じがたいことを言われたのです「父よ、彼らの罪をおゆるしてください。彼らは自分で何をしているのか分からずにいるのです」と。真実を申し上げます。この「彼ら」の中には「あなた」もいるのです。

主にある兄弟姉妹、ゆえにカインが放った「わたしの罰は重くて負いきれません」という言葉に対して、聖書はこう私達に語りかけるのです。「心配するな。あなたの罰をあなたが負う必要はない」と。

先にお話ししました。問題は最高の環境で起きたと。ということは、私達はいかなる場所でも問題を抱えうるものです。そうです、そこに私達の心がある限り、問題はあります。さらに私達が無力なことは、この問題は次の世代にも確実に継承されていくということです。そうアダムとエバの罪は確かにその子へと受け継がれました。この連鎖は続きます。しかし、ここにはそれを断ち切る力があります。そうです、それはイエス・キリストの十字架の愛です。自分がしたことのない、私達がしたことのない罰を全て身に追われ、父よ彼らをおゆるしてください、彼らは何をしているのか分からずにいるのですと言われる、私達が持ち合わせていない神の愛の力です。

カインは「私の罰は自分では負いきれない」と言いました。イエス様は言われました。「誰でも重荷を負うて苦勞している者は私のもとに来なさい。あなたたちを休ませてあげよう」と。この言葉に真実であり続けたイエス・キリストはまさしく私達が追いきれない罰を私達に代わり、全て負ってくださり、その罰を受けてくださったのです。

アダムとエバがあの実を食べた時に彼らの心に「恥」が生まれたと聖書は記録しています。またお話ししているようにその時以来、「罪」が私達人間の心に入りました。以来、私達は今もこの二つを有しながら生きています。

イエス・キリストは犯罪人とされ十字架にかけられました。磔にする犯罪人にかける情けなどありません。ゆえにイエス様は身ぐるみはがされ、まさしく全裸のような姿で十字架に磔にされたことでしょう。そう、アダムとエバはあの時、自らを恥、自分の体をいちじくの葉で覆ったのです。イエス様はその自らの恥を覆うべきものすらもはぎとられて、両手両足に釘が打たれたのです。誰のためですか。あなたのためです。あなたの「恥」とあなたの「罪」の罰を受けるべく、キリストはあなたの「恥」とあなたの「罪」を負われました。

今日の落穂に「罪と恥を取り去られた者」について書きました。そう、この二つは私達が高学歴であるとか、高収入を得ているとか、厳しい修行を耐えぬきましたというようなことで得られるものではないのです。この二つは我々のために「していないことをした」とされることをよしとしてくださいましたキリストの驚くべき愛を受け入れること以外に私達ができることができないものなのです。

最初の人、アダムから罪は入りました。しかし、後の人、イエス・キリストにあって私達は神の前に義とされるようになったと書いたパウロは、その筆を進めていくにあたり、その絶大な価値が心底、心に響いてきたのでありましょう。彼はこう書いたのです。驚くべきことは、このパウロの言葉は彼だけの言葉ではなく、そのまま私達が人生に寄って立つ言葉となるのです。

31 それでは、これらの事について、なんと言おうか。もし、神がわたしたちの味方であるなら、だれがわたしたちに敵し得ようか。32 ご自身の御子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために死に渡されたかたが、どうして、御子のみならず万物をも賜わらないことがあるか。33 だれが、神の選ばれた者たちを訴えるのか。神は彼らを義とされるのである。34 だれが、わたしたちを罪に定めるのか。キリスト・イエスは、死んで、否、よみがえって、神の右に座し、また、わたしたちのためにとりなして下さるのである。35 だれが、キリストの愛からわたしたちを離れさせるのか。患難か、苦悩か、迫害か、飢えか、裸か、危難か、剣か。36 「わたしたちはあなたのために終日、死に定められており、ほふられる羊のように見られている」と書いてあるとおりである。37 しかし、わたしたちを愛して下さったかたによって、わたしたちは、これらすべての事において勝ち得て余りがある。38 わたしは確信する。死も生も、天使も支配者も、現在のものも将来のものも、力あるものも、39 高いものも深いものも、その他どんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスにおける神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのである（ローマ8章31節—39節）。

ためならず、このイエス・キリストを私達の主として人生を歩みましょう。そう、それは私達の負いきれない罪を神の前に悔い改め、実際に2000年前にあなたのためにイエス・キリストが十字架にかかれたというその事実を信じて受け入れ、新しい人生を始めることなのです。お祈りしましょう。